

上／鉄骨工事をしている武道館新築工事現場全景。
下／「黒木は仕事に対してとても実直です。だからこそ悩むことも多いと思いますが、その姿勢にお客様や職人さんからの信頼は厚い。未経験のことに対して不安も多いでしょうが、実直にやりきっているから安心して見守っています」(右／楠城総括所長)

「絵を見ることが好きで美術館によく行って
いました。そのうちに美術館という建物自体に
も興味を湧いてきて、いつかこんな大きなもの
をつくりたいと思うようになりました」
中学時代は美術部に所属し、美術館へよく通
っていた。高校に進学してからは建物への興味
はますます深まり、大学は迷うことなく建設工
学科を選んだ。
「入学当初は設計士になろうと思っていまし
たが、勉強していくうちに『建物が出来上がる
過程に携わりたい』という想いが強くなり、現
場監督の仕事をもっと知りたくなりました」
就職活動では建設会社だけでなく、建材メー
カーをはじめ建設業全般の企業も視野に入れて
いたという。
「企業研究や自己分析を進めていくなかで自
分のやりたいことは何かを問い直したら、やは
り建物を建てる仕事をしたと気がきました」
現場監督になることを決意した黒木は大学院
修士課程を修了し、二〇〇八年、五洋建設(株)に
入社する。
まずは一歩を踏み出す
入社後、黒木が最初に配属された工事現場は、
二十九階建ての超高層マンションだった。
「大規模な現場だったので職員数や仕事の種
類も多く、覚えることが想像以上にたくさんあ
って大変でした」
スケールの大きさに戸惑うことはあったが、
先輩からの指導のもと仕事の基礎を着実に学ん
でいった。二年間で竣工を迎えると次に配属さ
れた現場では、担当工種を持つようになり、仕
事に対する向き合い方が大きく変わっていった。
「今まで先輩に頼っていた仕事を自分の判断
で進めていくので、はじめはとても緊張しまし
た。考えることが多くて悩んでいると『先頭に立
って段取りよく進めていかないと現場が終わら
ない』という意識を持って」と先輩に指摘されま
した。私が悩んでいる間も工事は進み、工程は
待ってくれません。そこで迷いがあると手戻り
や手待ちが生じ、結果的に工期が守れなくなっ
てしまいます。素早く決断してみんなを先導し
ていくという現場監督の役割を実感しました」
綿密に考えることはもちろん大事だが、すば
やく状況を判断して行動に移すことの大切さを
黒木は学んだ。

現場に立って働きたい

今年で入社一〇年目、大小様々な現場
を経験し判断力や行動力を高めてきた
今号の小町。現場代理人として現場に立
つのは二度目となり、自ら先陣を切って
立ち回るその姿は周囲にとって頼もしい
存在となっている。

「入学当初は設計士になろうと思っていまし
たが、勉強していくうちに『建物が出来上がる
過程に携わりたい』という想いが強くなり、現
場監督の仕事をもっと知りたくなりました」
就職活動では建設会社だけでなく、建材メー
カーをはじめ建設業全般の企業も視野に入れて
いたという。
「企業研究や自己分析を進めていくなかで自
分のやりたいことは何かを問い直したら、やは
り建物を建てる仕事をしたと気がきました」

現場監督になることを決意した黒木は大学院
修士課程を修了し、二〇〇八年、五洋建設(株)に
入社する。
まずは一歩を踏み出す
入社後、黒木が最初に配属された工事現場は、
二十九階建ての超高層マンションだった。
「大規模な現場だったので職員数や仕事の種
類も多く、覚えることが想像以上にたくさんあ
って大変でした」
スケールの大きさに戸惑うことはあったが、
先輩からの指導のもと仕事の基礎を着実に学ん
でいった。二年間で竣工を迎えると次に配属さ
れた現場では、担当工種を持つようになり、仕
事に対する向き合い方が大きく変わっていった。
「今まで先輩に頼っていた仕事を自分の判断
で進めていくので、はじめはとても緊張しまし
た。考えることが多くて悩んでいると『先頭に立
って段取りよく進めていかないと現場が終わら
ない』という意識を持って」と先輩に指摘されま
した。私が悩んでいる間も工事は進み、工程は
待ってくれません。そこで迷いがあると手戻り
や手待ちが生じ、結果的に工期が守れなくなっ
てしまいます。素早く決断してみんなを先導し
ていくという現場監督の役割を実感しました」
綿密に考えることはもちろん大事だが、すば
やく状況を判断して行動に移すことの大切さを
黒木は学んだ。

輝け! けんせつ小町

現場監督

黒木由佳

五洋建設株式会社 東京建築支店
千葉工業大学西浜建築工事事務所



「けんせつ小町」は、
日建連が定めた建設業で
活躍する女性の愛称です。



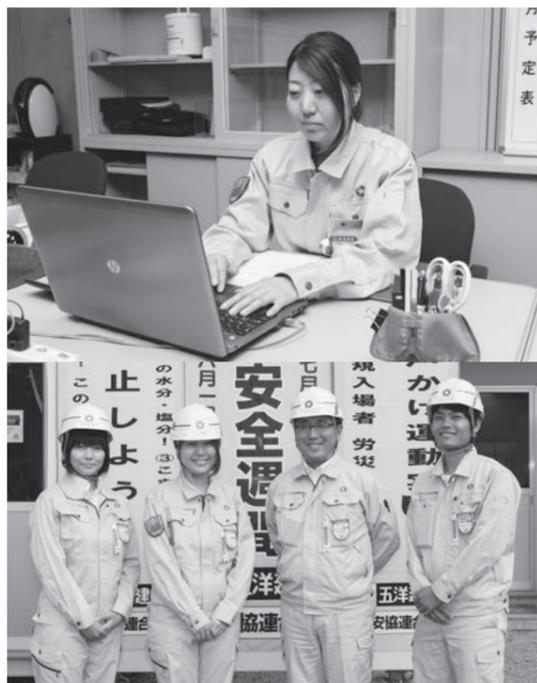
my Beginning 私が建設業界に入った理由
モノづくりの最前線で働く

my style

毎年、京都へ家族旅行をしています。就職して東京に出てきてからは宮崎で暮らす両親となかなか会う機会がないので、年に1回は集まろうと話したことがきっかけです。私は京都のまちなぎや食事、お寺をまわることが好きなんです。父が好きなお料理屋さんがあり、そこのお店は必ず予約して行っています。毎回旅行の時期を変えているので、春の桜や秋の紅葉など季節によって雰囲気がガラッと変わるのも楽しみです。旅行するのはいい気分転換になります。



寺田屋の前で、家族とともに。



右/現場では安全確認から品質管理まで細かく見てまわる。
上/全体の進捗を把握して、発注、工程の段取りを考えるので机に向かう時間も長くなる。
下/中央左が黒木、中央右が楠城総括所長。



my Growing

私が建設業界で学んだこと

自分が動かないと始まらない

「現場で十年間働いてきて、女性が働き続けるためには職場の環境整備はもちろん重要ですが、現在の働き方を変えていく必要もあると感じています。出産や子育てなどライフイベントを経験しようとする、仕事にかけられる時間も限られてきます。現場での仕事を続けたい気持ちがあります、そのためには時間の使い方をよほど工夫しなければならぬと感じています。その取組みの一つとして、月に二回土曜日の全体を目標にしていて、協力会社の皆さんと打ち合わせをして段取りを考えています」

二度目の現場代理人の経験を通して、仕事の視野が広がった。
「現場で十年間働いてきて、女性が働き続けるためには職場の環境整備はもちろん重要ですが、現在の働き方を変えていく必要もあると感じています。出産や子育てなどライフイベントを経験しようとする、仕事にかけられる時間も限られてきます。現場での仕事を続けたい気持ちがあります、そのためには時間の使い方をよほど工夫しなければならぬと感じています。その取組みの一つとして、月に二回土曜日の全体を目標にしていて、協力会社の皆さんと打ち合わせをして段取りを考えています」

働き方改革への取組み
黒木は今年の五月から担当している千葉県の武道館新築工事でも現場代理人を任されている。「安全と品質に今まで以上に気を使うようになりまし。自分のスキルを高め品質を向上させようとか、事故を起こしたくないという気持ちが強くなりました」

部下に対する仕事の指導は非常に難しい。手取り足取り教えるのは簡単だが、自分で考え行動した結果が学びや発見に繋がるからだ。黒木は初めて部下に仕事を与える立場となり、自分も悩みながら伝えていった。しかし、そんなプレッシャーや悩みは、竣工後からだ全体で感じる達成感を経て、大きな自信へと変わった。

「現場のトップとして、部下に仕事を任せるのは初めてだったので戸惑いました。やってほしい仕事を伝えて、その後進捗を確認しに現場へ行ってみると、私が思っていたものと違うことも。私自身にも迷いがあった、はっきりと伝えられなかったのが原因でもありました。色々な課題に直面しましたが、今年の二月末に無事竣工し、近隣の方々にご挨拶に伺ったとき、『お疲れ様でした』と言われた瞬間、肩の荷が下りて安堵感と自分のやり方できり上げたという嬉しさが込み上げてきました」

悩みや不安が自信に変わる
黒木はマンションや商業施設など数々の現場で経験を積み、二〇一六年八月に配属された七カ所目の現場で初めて現場代理人を任された。「今までとは責任の重さが全く違いました。現場代理人になると工事全体の進捗を把握して、問題が起きたらその対応や新しい方針を決めたり、部下からの質問に的確に答えていかなければなりません。それらを素早く判断するために、様々な知識が必要になりました」

手配が遅かったため、前の工程が終わっているのに次の工程に進めず時間が空いてしまったこともあったという。考えたことを確認してくれる上司は現場に常駐しておらず、自分の判断で現場が進んでいくことは黒木にとって大きなプレッシャーになったに違いない。



昨年入社した渡邊(左)の教育にも力が入る。

profile



くろぎ・ゆか ●1983(昭和58)年、宮崎県生まれ。2008(平成20)年、五洋建設(株)に入社。商業施設や倉庫など数々の建築現場を経て、2016(平成28)年8月に配属された事務所兼倉庫の現場で初めて現場代理人を任される。2017(平成29)年5月より千葉工業大学茜浜建築工事事務所に2度目の現場代理人として配属され、今に至る。

黒木は現場での新しい働き方を模索している。「コスト管理やお客様への対応など、まだまだ勉強しないといけないと感じています。経験を積んで将来もっと自信を持って現場を動かしていきたいですね」

モノづくりの最前線で働きたいという学生時代からの想いはぶれず、現場代理人として活躍する黒木。その物腰は柔らかく「入社前は、『自分たちがつくっているんだ』という感覚をここまで味わえるとは思いませんでした」と話してくれた。社内でも、現場代理人の経験がある技術系の女性社員は黒木を含め二人しかいない。現場をまとめる立場に忙殺されることなく、将来を見据えて働き方改革にも挑む姿は頼もしい。温かな黒木はあくまでも自然体だが、新しいけんせつ小町のロールモデルとして、今までにならぬ工事所長の姿を見せてくれるにちがいない。

my **Growing** 私が建設業界で学んだこと